1 月 23 日、2015 年度総会後「現在の世界情勢について」と題して読売新聞の岡崎哲記者より講演をしていただいた。講演の概要を以下の通りご紹介します。

【講演の要点】

読売新聞社 岡崎哲

昨年１１月のパリ同時テロで再び大きな注目を集めたイスラム過激派「イスラム国」と関連する諸課題を、旧ソ連のアフガン侵攻から始まる歴史的な背景や宗派間の対立を縦糸に解説した。
また、シリア危機に際し、「米国は世界の警察官ではない」とオバマ大統領が宣言した米国の威信の低下や欧州の難民問題なども取り上げた。

【会員の皆様へ】
今年も講演にお招き頂き、誠にありがとうございました。
私にとって、現在の国際問題について自分の考えをまとめる最適な機会を頂戴したと思っています。ふだん、外国人と接し、日本や世界がどうあるべきか常に真摯に考えていらっしゃる感度の高い皆さんの前で話すのはごまかしがききませんので（笑)、気合を入れて臨みました。
内容は実は、ほとんどが読売新聞で日々報道されていることのダイジェストでした。
今回も世界最大の報道機関、読売新聞の紙面を凝縮したエッセンスを紹介させて頂いたつもりです。
ご要望にお応えすると、持ち時間を大いに超えてしまうため、話題を絞り込むのに腐心しました。
ムハンマドの誕生からのイスラム王朝の歴史、近代の中東の紛争史、原油など資源で動く国際社会の原理、世界と中部地方との関係、中国の長期戦略、今年の米大統領選、伊勢志摩サミット…もっと深堀りするともっと世界は輪郭を帯びてきます。
でも、一番ホットなイシューに絞ってお話ししなければ、と思い、ほぼイスラム過激派「イスラム国」の話題に絞り込みました。

質問も頂戴しましたが、宗派の違いでなぜ人々は激しく争うのか。
衝突は、互いが自らが正しいと信じる教えを他に広げたいと考え、それがぶつかりあうことで起こるのでしょう。
それでも、多くの人たちは平和を愛し、流血は望まないはずです。
それなのになぜ、相手の命を奪うところまでエスカレートするのでしょうか。

問題は武力や暴力で相手を屈服させてでも、考えを押し通そうとする一握りの人たちの過激な考えがあるのではないかと思っています。そして一部は、要は宗教の名に借りた権力闘争としても説明がつくように思います。

作家の村上春樹氏の名著「１Q84」を講演の冒頭に取り上げたのもそうした私の問題認識からです。
村上氏は著作で、オウム真理教をモデルにした宗教団体「さきがけ」で武力を使って既存の秩序を破壊してでも自らの考えを他に押しつけようとする過激思想や原理主義の恐ろしさを描きました。

講演後にフレンドシップフォースの女性会員の方から、村上氏がか弱い人間を
「卵」に、権力側を強い「壁」に例えたスピーチに関心を持っていただいた旨お伺いしました。

日本人の作家が世界に投げかけた原理主義の危険性、「…イズム」の病理に普遍性があるから世界中でベストセラーになっているのではないかと思っています。
彼の作品には我々はどうあるべきか、ヒントと示唆がたくさんあります。
人はそれぞれ「正義」があって、
争い合うのは仕方ないのかも知れない
だけど僕の「正義」が
きっと彼を傷付けていたんだね
人はそれぞれ「正義」があって、
争い合うのは仕方ないのかも知れない
だけど僕の嫌いな「彼」も
彼なりの理由があるとおもうんだ

意外にも、今、若者に人気の日本の４人組人気ロックバンド「ＳＥＫＡＩ　ＮＯ　ＯＷＡＲＩ」（セカオワ）がヒット曲「ドラゴンナイト」に書いた詩にも重要なヒントがありました。
講義のエンディングで取り上げたとおりですが、世界の人たちとのコミュニケーションを取るための大事な考え方だと思っています。

今年も皆さんの活動が意味あるものになりますように、そして交流に旅立たれる方が、無事、目的を遂げられますようにささやかながら祈っております。

お礼まで。

読売新聞社 岡崎哲

＊□ 編注：本稿については記者の個人的な考え方を示したもので、読売新聞社の社論とは異なる場合があります。